

資料編

歴代管理職・歴代教授

予算規模の推移

科学研究費(文部科学省・厚生労働省)の獲得状況

科学研究費以外の外部資金の獲得状況

入学試験受験者数・競争率の推移

「京都府立医科大学機能整備計画」について

年 表

歴代管理職

法人化：2008(平成20)年以降

2023年1月末現在

学長

山岸 久一	平成18年4月～平成23年3月
吉川 敏一	平成23年4月～平成29年3月
竹中 洋	平成29年4月～

副学長

木下 茂	平成23年4月～平成27年3月
高松 哲郎	平成23年4月～平成25年3月
三木 恒治	平成24年1月～平成25年3月
伏木 信次	平成25年4月～平成27年3月
福居 顕二	平成25年4月～平成27年3月
中川 正法	平成27年4月～令和3年3月
久保 俊一	平成27年4月～平成29年3月
渡邊 能行	平成27年4月～平成29年3月
吉村 了勇	平成27年4月～平成29年3月
北脇 城	平成29年4月～平成31年3月
細井 創	平成29年4月～平成31年3月
奥田 司	平成29年4月～令和3年3月
松田 修	平成31年4月～令和3年3月
橋本 直哉	令和3年4月～
佐和 貞治	令和3年4月～
大辻 英吾	令和3年4月～
加藤 則人	令和3年4月～

附属病院長

木下 茂	平成19年4月～平成21年3月
岩井 直躬	平成21年4月～平成23年3月
三木 恒治	平成23年4月～平成25年3月
福居 顕二	平成25年4月～平成27年3月
吉村 了勇	平成27年4月～平成29年3月
北脇 城	平成29年4月～平成31年3月
夜久 均	平成31年4月～

附属北部医療センター病院長

中川 正法	平成25年4月～令和3年3月
落合 登志哉	令和3年4月～

学生部長

有 蘭 直樹	平成19年4月～平成21年3月
横山 尚彦	平成21年4月～平成23年3月
田代 啓	平成23年4月～平成27年3月
北脇 城	平成27年4月～平成29年3月
田中 秀央	平成29年4月～令和2年3月
橋本 直哉	令和2年4月～

教養教育部長

花 井 一光	平成19年4月～平成21年3月
棚 次 正和	平成21年4月～平成23年3月
長 崎 生光	平成23年4月～平成25年3月
小 野 勝彦	平成25年4月～平成27年3月
木 塚 雅貴	平成27年4月～平成29年3月
小 野 勝彦	平成29年4月～令和3年3月

附属図書館長

田 中 義文	平成19年4月～平成21年3月
福 居 顕二	平成21年4月～平成23年3月
伏 木 信次	平成23年4月～平成25年3月
渡 邊 能行	平成25年4月～平成27年3月
丸 中 良典	平成27年4月～平成29年3月
伊 東 恭子	平成29年4月～令和3年3月
加 藤 則人	令和3年4月～

研究部長

木 村 實	平成19年4月～平成22年3月
河 田 光博	平成22年4月～平成24年3月
奥 田 司	平成24年4月～平成27年3月
松 田 修	平成27年4月～平成31年3月
八 木 田 和弘	平成31年4月～

医療センター所長

岸 本 三郎	平成19年4月～平成21年3月
吉 川 敏一	平成21年4月～平成23年3月
福 居 顕二	平成23年4月～平成25年3月
久 保 俊一	平成25年4月～平成27年3月
細 井 創	平成27年4月～平成29年3月
水 野 敏樹	平成29年4月～平成31年3月
中 川 正法	平成31年4月～令和3年3月
大 辻 英吾	令和3年4月～

国際学術交流センター長

水 野 敏樹	平成31年4月～
--------	----------

教育センター長

天 谷 文昌	令和3年4月～
--------	---------

看護学科長

岡 山 寧子	平成17年4月～平成21年3月
北 島 謙吾	平成21年4月～平成23年3月
岡 山 寧子	平成23年4月～平成25年3月
西 田 直子	平成25年4月～平成27年3月
星 野 明子	平成27年4月～平成29年3月
岩 脇 陽子	平成29年4月～令和3年3月
吾 妻 知美	令和3年4月～

事務局長

兒 玉 幸長	平成20年4月～平成21年3月
木 村 幸人	平成21年4月～平成23年3月
土 家 篤	平成23年4月～平成25年3月
山 崎 清吾	平成25年4月～平成28年3月
坂 本 修司	平成28年4月～平成29年3月
宮 地 徹	平成29年4月～平成31年3月
藤 井 和男	平成31年4月～令和3年3月
奥 野 昌徳	令和3年4月～

大学院医学研究科・医学部医学科

人文科学教室		
鶴田 多八	大正10年9月～昭和8年6月	
佐伯 梅友	昭和6年4月～昭和17年5月	
穎原 退蔵	昭和2年11月～昭和6年3月	
浅田 善二郎	昭和17年5月～昭和23年3月	
吉田 忠勝	昭和45年2月～昭和59年3月	
湯浅 慎一	昭和59年7月～平成14年3月	

社会科学教室		
鯖田 豊之	昭和45年2月～平成元年3月	
植木 哲	平成元年4月～平成5年3月	
新村 拓	平成5年4月～平成13年3月	

人文・社会科学教室		
棚次 正和	平成14年12月～平成15年3月	

英語学教室		
宮田 一	大正11年2月～昭和26年3月	
佐々木 宗要	大正11年2月～昭和26年3月	
習田 達夫	昭和22年8月～昭和25年7月	
服部 英二	昭和30年4月～昭和50年4月	
増田 英夫	昭和50年9月～平成4年3月	
須加 葉子	平成4年4月～平成6年5月	

ドイツ語教室		
榎木 安三郎	大正11年3月～昭和26年3月	
高坂 正顕	大正13年3月～昭和11年3月	
宇野 喜代之助	大正13年10月～昭和2年3月	
武田 鉄五郎	昭和3年3月～昭和26年3月	
下程 勇吉	昭和12年1月～昭和22年6月	
白井 竹次郎	昭和17年3月～昭和24年8月	
原 俊彦	昭和30年9月～昭和45年3月	
山本 尤	昭和46年4月～平成6年3月	
大武 博	平成7年10月～平成15年3月	

第一外国語教室 (元 ドイツ語教室)		
大武 博	平成7年10月～平成15年3月	

第二外国語教室 (元 英語学教室)		
須加 葉子	平成6年5月～平成15年3月	

数学教室		
永井 種次郎	大正10年9月～大正13年5月	
東儀 正	大正14年4月～昭和26年3月	
森 誉四郎	昭和17年3月～昭和25年3月	
久保 忠雄	昭和30年4月～昭和36年4月	
桑垣 煥	昭和36年8月～昭和59年3月	
八木 克己	昭和59年4月～平成15年3月	

物理学教室		
柴 久光	大正11年2月～昭和17年5月	
塘 仁三	昭和17年5月～昭和22年3月	
杉原 雅	昭和23年3月～昭和25年3月	
藤喜 好文	昭和30年6月～昭和53年3月	
斎藤 武	昭和53年4月～平成7年3月	
花井 一光	平成7年4月～平成15年3月	

化学教室		
吉峰 時之輔	大正12年3月～大正14年10月	
森 益蔵	大正12年11月～昭和17年9月	
森島 三郎	大正14年10月～昭和11年3月	
荒木 新太郎	昭和12年1月～昭和26年3月	
三谷 一雄	昭和30年4月～昭和54年3月	
森山 祥彦	昭和54年4月～平成15年3月	

生物学教室		
門田 次郎吉	大正10年9月～大正11年3月	
箕浦 忠愛	大正11年8月～昭和26年3月	
井上 四郎	昭和3年3月～昭和25年3月	
仲尾 善雄	昭和30年9月～昭和34年7月	
小野 善三郎	昭和34年12月～昭和44年3月	
高本 薫	昭和44年10月～昭和63年3月	
仲村 春和	昭和63年9月～平成6年2月	
荒木 正介	平成6年5月～平成10年4月	
佐野 護	平成10年11月～平成15年3月	

解剖学教室		
島田 吉三郎	大正7年12月～昭和14年5月	
勝 義孝	昭和3年8月～昭和23年4月	
野田 秀俊	昭和22年4月～昭和35年11月	
山田 博	昭和23年2月～昭和50年4月	
佐野 豊	昭和36年6月～平成2年3月	
井端 泰彦	昭和50年7月～平成12年9月	
河田 光博	平成2年8月～平成15年3月	
横山 尚彦	平成14年8月～平成15年3月	

生理学教室		
越智 真逸	大正4年12月～昭和22年9月	
勝 義孝	昭和23年4月～昭和43年11月	
吉村 寿人	昭和22年9月～昭和45年3月	
岩瀬 善彦	昭和33年9月～昭和56年3月	
亘 弘	昭和45年6月～昭和52年12月	
森本 武利	昭和53年4月～平成11年3月	
外山 敬介	昭和56年7月～平成11年2月	
丸中 良典	平成12年2月～平成15年3月	
木村 實	平成12年5月～平成15年3月	

生化学教室

吉川 順吉	大正4年5月～昭和3年11月
後藤 基幸	大正12年12月～昭和21年2月
藤田 秋治	昭和21年12月～昭和33年3月
能勢 善嗣	昭和33年10月～昭和53年9月
岩島 昭夫	昭和53年11月～平成7年3月
西野 輔翼	平成7年10月～平成15年3月

病理学教室

角田 隆	明治34年4月～昭和14年8月
梅原 信正	大正2年4月～昭和18年4月
荒木 正哉	昭和16年11月～昭和40年3月
田中 秋三	昭和22年12月～昭和42年3月
三宅 清雄	昭和40年6月～昭和49年3月
藤田 哲也	昭和42年6月～平成7年3月
米沢 猛	昭和49年5月～昭和57年3月
芦原 司	昭和57年5月～平成12年10月
高松 哲郎	平成7年4月～平成15年3月
伏木 信次	平成10年4月～平成15年3月

医動物学教室

長花 操	昭和34年9月～昭和45年3月
吉田 幸雄	昭和45年5月～平成元年3月
有蘭 直樹	平成元年4月～平成15年3月

微生物学教室

常岡 良三	明治39年4月～昭和17年8月
加藤 明敏	昭和17年12月～昭和18年3月
鈴木 成美	昭和18年11月～昭和41年3月
菅沼 惇	昭和41年10月～昭和49年12月
岸田 綱太郎	昭和50年4月～昭和58年3月
今西 二郎	昭和58年7月～平成15年3月

薬理学教室

草島 廉三郎	大正8年4月～大正11年8月
藤井 猪十郎	大正13年3月～昭和27年4月
小澤 俊次	昭和29年9月～昭和46年3月
栗山 欣弥	昭和46年8月～平成8年3月
矢部 千尋	平成8年9月～平成15年3月

衛生学教室

赤野 六郎	昭和12年4月～昭和19年12月
緒方 洪平	昭和21年12月～昭和31年3月
額田 粲	昭和32年2月～昭和42年3月
永田 久紀	昭和43年1月～昭和61年3月
阿部 達生	昭和61年11月～平成13年3月

公衆衛生学教室

川井 啓市	昭和48年10月～平成7年9月
酒井 敏行	平成8年7月～平成15年3月
渡邊 能行	平成10年2月～平成15年3月

法医学教室

小片 重男	昭和32年2月～昭和49年3月
山澤 吉平	昭和49年6月～昭和56年10月
古村 節男	昭和57年5月～平成9年3月
安原 正博	平成10年1月～平成15年3月

内科学教室

小川 倅五郎	大正3年10月～大正15年8月
梅田 信義	大正7年2月～大正11年6月
浅山 忠愛	大正12年2月～昭和18年1月
飯塚 直彦	大正12年9月～昭和25年5月
細田 孟	昭和18年3月～昭和34年3月
川井 銀之助	昭和23年1月～昭和32年7月
館石 叔	昭和26年8月～昭和33年5月
増田 正典	昭和33年1月～昭和53年3月
丸本 晋	昭和34年8月～昭和47年3月
吉田 秀雄	昭和35年4月～昭和53年3月
伊地知 濱夫	昭和48年9月～昭和62年3月
近藤 元治	昭和53年7月～平成12年3月
瀧野 辰郎	昭和54年4月～昭和63年7月
中川 雅夫	昭和62年8月～平成15年3月
加嶋 敬	平成元年8月～平成14年3月
吉川 敏一	平成12年9月～平成15年3月
岡上 武	平成14年11月～平成15年3月

外科学教室

川村 叶一	大正3年8月～昭和2年9月
鈴木 正次	大正11年9月～昭和3年11月
望月 成人	昭和2年10月～昭和29年2月
横田 浩吉	昭和3年12月～昭和28年9月
河村 謙二	昭和29年5月～昭和41年3月
峯 勝	昭和29年9月～昭和42年3月
橋本 勇	昭和42年8月～昭和58年6月
間島 進	昭和43年4月～昭和59年3月
岡 隆宏	昭和58年12月～平成11年3月
高橋 俊雄	昭和59年9月～平成10年3月
山岸 久一	平成10年11月～平成15年3月
吉村 了勇	平成11年8月～平成15年3月

脳神経外科学教室

平川 公義	昭和53年4月～昭和63年3月
上田 聖	平成元年3月～平成10年4月
峯浦 一喜	平成10年8月～平成15年3月

整形外科教室

来須 正男	昭和23年1月～昭和33年3月
諸富 武文	昭和33年11月～昭和53年3月
榎田 喜三郎	昭和52年6月～平成元年3月
平澤 泰介	平成元年7月～平成13年3月
久保 俊一	平成14年2月～平成15年3月

産婦人科学教室		
山田 一夫	大正14年11月～昭和28年6月	
沢崎 千秋	昭和29年3月～昭和33年3月	
徳田 源市	昭和33年12月～昭和45年9月	
岡田 弘二	昭和46年3月～平成7年3月	
本庄 英雄	平成7年4月～平成15年3月	

小児科学教室		
三浦 操一郎	大正6年7月～昭和3年9月	
斉藤 二郎	昭和3年12月～昭和26年5月	
中村 恒男	昭和26年11月～昭和48年3月	
楠 智一	昭和48年6月～昭和61年3月	
澤田 淳	昭和61年7月～平成12年3月	
杉本 徹	平成12年5月～平成15年3月	

眼科学教室		
増田 隆	大正5年1月～昭和14年12月	
藤原 謙造	大正15年7月～昭和23年9月	
弓削 経一	昭和22年10月～昭和43年1月	
谷 道之	昭和43年6月～昭和51年11月	
糸井 素一	昭和52年6月～平成3年3月	
木下 茂	平成4年4月～平成15年3月	

皮膚科学教室		
中川 清	大正7年2月～昭和22年10月	
片岡 八束	昭和22年10月～昭和29年11月	
岩下 健三	昭和30年12月～昭和43年3月	
外松 茂太郎	昭和43年7月～昭和60年3月	
安野 洋一	昭和60年8月～平成13年3月	
岸本 三郎	平成14年2月～平成15年3月	

泌尿器科学教室		
小田 完五	昭和39年5月～昭和50年6月	
渡辺 決	昭和51年1月～平成10年3月	
三木 恒治	平成10年6月～平成15年3月	

耳鼻咽喉科学教室		
中村 登	明治42年5月～昭和20年7月	
中村 文雄	昭和21年4月～昭和45年3月	
水越 治	昭和45年6月～昭和63年3月	
村上 泰	昭和63年9月～平成11年3月	
久 育男	平成11年6月～平成15年3月	

精神医学教室		
久保 昱二郎	大正15年7月～昭和26年11月	
小谷 庄四郎	昭和27年2月～昭和41年3月	
飯塚 礼二	昭和41年11月～昭和45年3月	
加藤 伸勝	昭和46年5月～昭和58年8月	
中嶋 照夫	昭和58年9月～平成8年3月	
福居 顯二	平成8年7月～平成15年3月	

放射線医学教室		
後藤 五郎	昭和3年4月～昭和32年6月	
金田 弘	昭和33年4月～昭和45年3月	
村上 晃一	昭和46年4月～平成4年3月	
前田 知穂	平成4年5月～平成11年3月	
西村 恒彦	平成11年7月～平成15年3月	

麻酔学教室		
宮崎 正夫	昭和41年9月～昭和63年3月	
田中 義文	平成2年11月～平成15年3月	

臨床検査部		
島田 信男	昭和48年11月～昭和63年3月	
吉村 學	昭和63年4月～平成12年3月	

歯科学		
本永 七三郎	大正5年4月～昭和13年8月	
堀 亘孝	平成6年4月～平成12年3月	

附属小児疾患研究施設		
尾内 善四郎	昭和63年7月～平成11年3月	
岩井 直躬	昭和63年7月～平成23年3月	
濱岡 建城	平成11年6月～平成28年3月	

附属脳・血管系老化研究センター		
中島 健二	平成2年11月～平成14年3月	
伏木 信次	平成10年1月～平成15年3月	
渡邊 能行	平成10年3月～平成15年3月	
中川 正法	平成14年10月～平成15年3月	

〔大学院重点化後〕

分子標的癌予防医学		
酒井 敏行	平成15年4月～平成31年3月	

分子標的予防医学 (元 分子標的癌予防医学)		
武藤 倫弘	令和2年2月～	

地域保健医療疫学		
渡邊 能行	平成15年4月～平成30年12月	
上原 里程	平成31年1月～令和3年10月	
高嶋 直敬	令和5年1月～	

法医学		
安原 正博	平成15年3月～平成20年3月	
池谷 博	平成20年4月～	

救急・災害医療システム学		
太田 凡	平成22年4月～	

総合医療・医学教育学		
山脇 正永	平成23年1月～令和2年11月	

生物統計学

手良向 聡 平成26年6月～

※平成26年新設

医学生命倫理学

棚次 正和 平成15年4月～平成27年3月

瀬戸山 晃一 平成27年4月～

統計学

八木 克己 平成15年4月～平成18年3月

長崎 生光 平成18年4月～平成26年3月

基礎統計学(元 統計学)

長崎 生光 平成26年4月～平成28年3月

生命基礎数理学

長崎 生光 平成28年4月～

小児発達医学

杉本 徹 平成15年4月～平成19年6月

細井 創 平成20年4月～平成29年3月

発達循環病態学

濱岡 建城 平成15年4月～平成19年3月

小児循環器・腎臓病学(元 発達循環病態学)

濱岡 建城 平成19年4月～平成28年3月

小児科学(元 小児発達医学、小児循環器・腎臓病学)

細井 創 平成29年4月～令和3年3月

家原 知子 令和3年9月～

発達制御外科学

岩井 直躬 平成15年11月～平成19年3月

小児外科学(元 発達制御外科学)

岩井 直躬 平成19年4月～平成23年3月

田尻 達郎 平成23年11月～令和4年3月

小野 滋 令和5年1月～

女性生涯医科学

本庄 英雄 平成15年4月～平成19年9月

北脇 城 平成20年7月～令和3年3月

森 泰輔 令和3年10月～

応用言語学

大武 博 平成15年4月～平成21年3月

須加 葉子 平成15年4月～平成21年3月

木塚 雅貴 平成21年11月～平成28年3月

医療コミュニケーション学

木塚 雅貴 平成28年4月～

ゲノム医学

田代 啓 平成16年4月～

分子生化学

西野 輔翼 平成15年4月～平成19年3月

森山 祥彦 平成15年4月～平成16年3月

奥田 司 平成19年11月～

分子病態検査医学

谷脇 雅史 平成15年4月～平成17年10月

分子病態感染制御・検査医学

貫井 陽子 令和3年11月～

免疫内科学(元 生体機能制御学)

吉川 敏一 平成15年4月～平成20年1月

消化器病態制御学

岡上 武 平成15年3月～平成19年3月

消化器内科学

吉川 敏一 平成20年2月～平成23年3月

伊藤 義人 平成25年4月～

循環器病態制御学

松原 弘明 平成15年4月～平成19年3月

循環器内科学(元 循環器病態制御学)

松原 弘明 平成19年4月～平成25年2月

的場 聖明 平成27年8月～

内分泌・代謝内科学(元 内分泌機能制御学)

中村 直登 平成21年2月～平成27年3月

福井 道明 平成27年8月～

呼吸器内科学(元 呼吸器病態制御学)

高山 浩一 平成27年5月～

血液・腫瘍内科学

谷脇 雅史 平成17年11月～平成28年3月

血液内科学

黒田 純也 平成28年11月～

神経内科学(元 神経病態制御学)

中川 正法 平成15年4月～平成25年3月

水野 敏樹 平成25年8月～令和3年3月

脳神経内科学(元 神経内科学)

水野 敏樹 令和3年4月～

皮膚病態制御学	岸本 三郎	平成15年4月～平成21年3月	寄生病態学	有菌 直樹	平成15年4月～平成23年3月
皮膚科学	加藤 則人	平成21年8月～	感染病態学 (元 寄生病態学)	中屋 隆明	平成23年12月～
生体構造科学	河田 光博	平成15年4月～平成27年3月	感染免疫病態制御学	今西 二郎	昭和15年4月～平成19年3月
	田中 雅樹	平成28年2月～	免疫・微生物学 (元 感染免疫病態制御学)	今西 二郎	昭和19年4月～平成22年3月
生体機能形態科学	横山 尚彦	平成15年4月～平成29年3月		松田 修	平成22年6月～平成23年3月
	八代 健太	平成30年11月～	免疫学 (元 免疫・微生物学)	松田 修	平成23年4月～
生理機能制御学	丸中 良典	平成15年4月～平成19年3月	病態分子薬理学	矢部 千尋	平成15年4月～令和3年3月
細胞生理学 (元 生理機能制御学)	丸中 良典	平成19年4月～平成30年3月		赤路 健一	平成16年4月～平成22年3月
	樽野 陽幸	平成30年9月～		榎村 敦詩	令和3年10月～
神経生理学	木村 實	平成15年4月～平成22年3月	精神機能病態学	花井 一光	平成15年4月～平成19年3月
	八木田 和弘	平成22年9月～平成25年3月		福居 顯二	平成15年4月～平成27年12月
統合生理学 (元 神経生理学)	八木田 和弘	平成25年4月～	放射線診断治療学	成 本 迅	平成28年7月～
生命情報分子科学	花井 一光	平成19年4月～平成23年3月		西村 恒彦	平成15年4月～平成23年3月
	佐野 護	平成19年4月～平成20年3月		山田 惠	平成24年4月～
	小野 勝彦	平成20年7月～平成22年3月	医薬品化学	赤路 健一	平成22年4月～平成23年3月
物質生命基礎科学 (元 生命情報分子科学)	上原 正三	平成23年4月～令和4年3月		鈴木 孝禎	平成23年9月～令和元年5月
神経発生生物学	小野 勝彦	平成22年4月～	医系化学 (元 医薬品化学)	大庭 誠	令和2年3月～
人体病理学 (元 計量診断病理学)	柳澤 昭夫	平成15年9月～平成28年3月	消化器腫瘍制御外科学	山岸 久一	平成10年11月～平成18年3月
細胞分子機能病理学	高松 哲郎	平成15年4月～平成27年3月	消化器外科学 (元 消化器機能制御外科学、消化器腫瘍制御外科学)	大辻 英吾	平成19年3月～
	田中 秀央	平成27年4月～	移植・再生制御外科学	吉村 了勇	平成15年4月～平成19年3月
分子病態病理学	伏木 信次	平成15年4月～平成27年3月	移植・再生外科学 (元 移植・再生制御外科学)	吉村 了勇	平成19年4月～平成30年3月
	伊東 恭子	平成27年4月～	内分泌・乳腺外科学 (元 内分泌・乳腺機能制御外科学)	田口 哲也	平成27年1月～令和3年3月
				直居 靖人	令和4年1月～

心臓血管・呼吸器機能制御外科学

北村 信夫 平成15年4月～平成15年9月
夜久 均 平成16年11月～平成19年3月

心臓血管・呼吸器外科学 (元 心臓血管・呼吸器機能制御外科学)

夜久 均 平成19年4月～平成23年3月

心臓血管外科学 (元 心臓血管・呼吸器外科学)

夜久 均 平成23年4月～令和4年3月

呼吸器外科学 (元 心臓血管・呼吸器外科学)

井上 匡美 平成27年7月～

脳神経機能再生外科学

峯 浦 一喜 平成15年4月～平成27年3月
橋本 直哉 平成27年7月～

運動器機能再生外科学

久保 俊一 平成15年4月～平成31年3月
高橋 謙治 令和2年2月～

リハビリテーション医学

三上 靖夫 平成31年4月～

視覚機能再生外科学

木下 茂 平成15年4月～平成27年3月
外園 千恵 平成27年8月～

頭頸部機能再生外科学

久 育男 平成15年4月～平成19年3月

耳鼻咽喉科・頭頸部外科学 (元 頭頸部機能再生外科学)

久 育男 平成19年4月～平成27年3月
平野 滋 平成28年3月～

泌尿器機能再生外科学

三木 恒治 平成15年4月～平成19年3月

泌尿器外科学 (元 泌尿器機能再生外科学)

三木 恒治 平成19年4月～平成27年3月
浮村 理 平成27年8月～

麻酔学

田中 義文 平成15年4月～平成19年3月

麻酔科学 (元 麻酔学)

田中 義文 平成19年4月～平成22年3月
佐和 貞治 平成22年7月～

疼痛・緩和医療学

細川 豊史 平成26年12月～平成30年3月
天谷 文昌 令和元年6月～

医療レギュラトリーサイエンス学

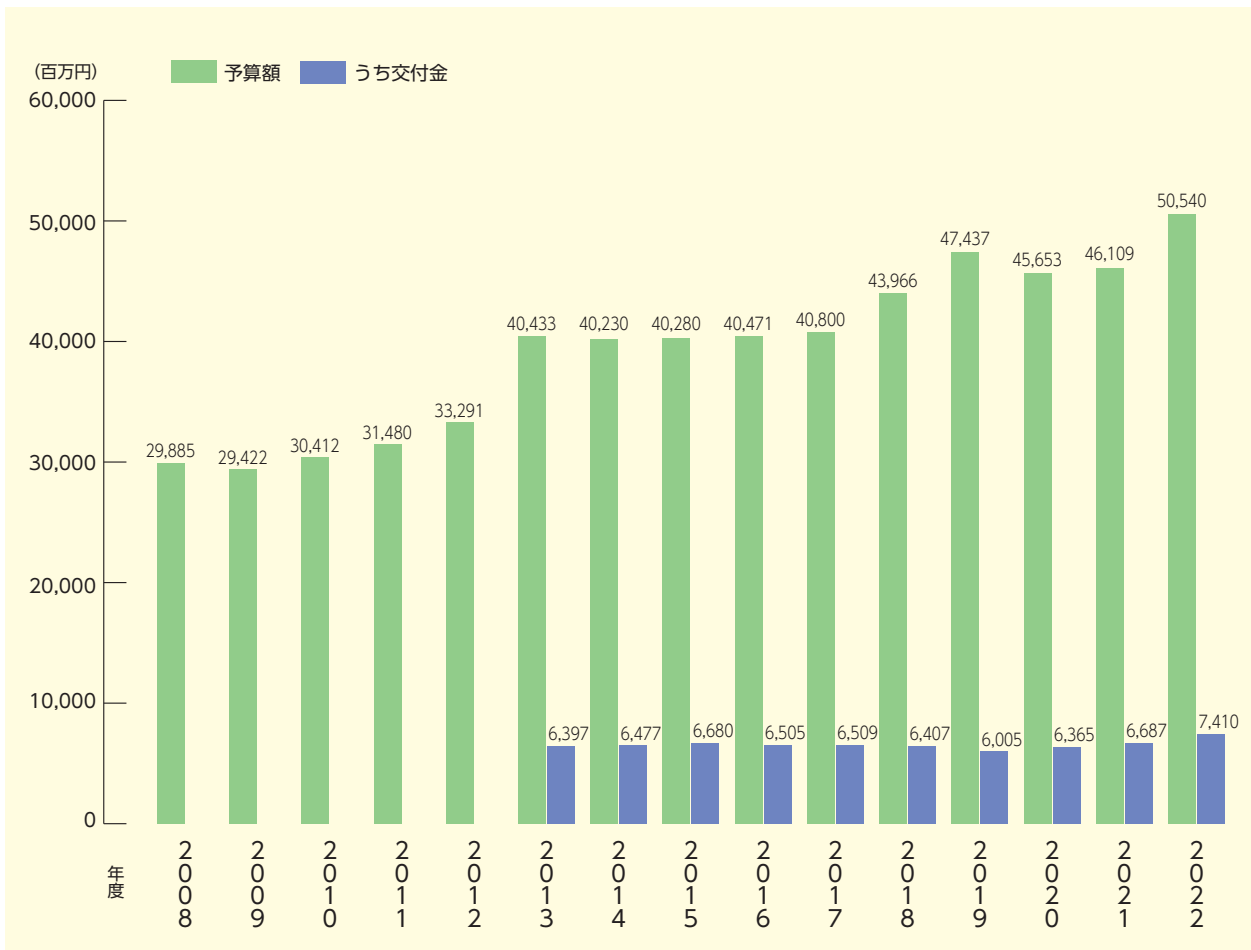
中垣 俊郎 平成28年1月～令和2年3月
林 憲一 令和2年7月～

大学院保健看護学研究科・医学部看護学科

教養教育講座		
塩見 武雄	平成14年4月～平成18年3月	
木村 みさか	平成14年4月～平成25年3月	
医学講座		
森田 益次	平成14年4月～平成22年3月	
理論看護学		
三瓶 真貴子	平成18年10月～平成21年3月	
臨床健康科学		
山中 龍也	平成22年4月～令和2年3月	
島田 順一	令和2年4月～	
小児発達保健学		
森本 昌史	平成28年4月～	
女性生涯保健学		
岩破 一博	平成28年4月～令和2年3月	
楠木 泉	令和2年4月～	
基礎看護学		
上野 範子	平成14年4月～平成16年3月	
西田 直子	平成16年4月～平成27年3月	
關戸 啓子	平成27年10月～令和4年3月	
看護倫理・管理学		
吾妻 知美	平成26年4月～	
成人看護学		
種池 禮子	平成14年4月～平成17年3月	
中川 雅子	平成17年4月～平成24年3月	
岩脇 陽子	平成24年10月～令和4年3月	
吉岡 さおり	令和4年7月～	
精神看護学		
北島 謙吾	平成15年4月～令和3年3月	
郷良 淳子	令和3年12月～	
母性看護学・助産学		
宮中 文子	平成14年4月～平成19年3月	
真鍋 えみ子	平成19年4月～平成26年3月	
松岡 知子	平成26年4月～	
老年・在宅看護学		
岡山 寧子	平成14年4月～平成26年3月	
江本 厚子	平成26年7月～令和4年3月	
毛利 貴子	令和4年6月～	

地域看護学		
福本 恵	平成14年4月～平成21年3月	
星野 明子	平成21年10月～令和3年3月	
志澤 美保	令和3年10月～	

予算規模の推移

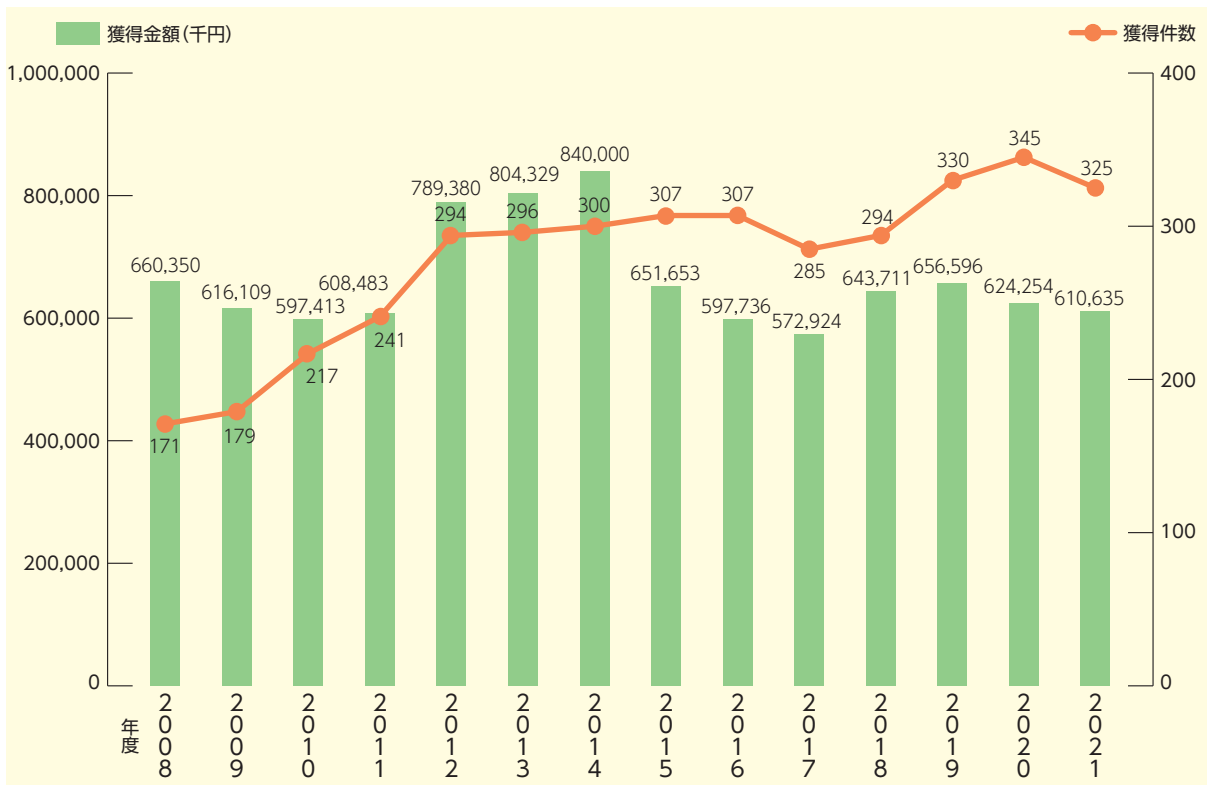


注1 2013年～北部医療センター附属病院化

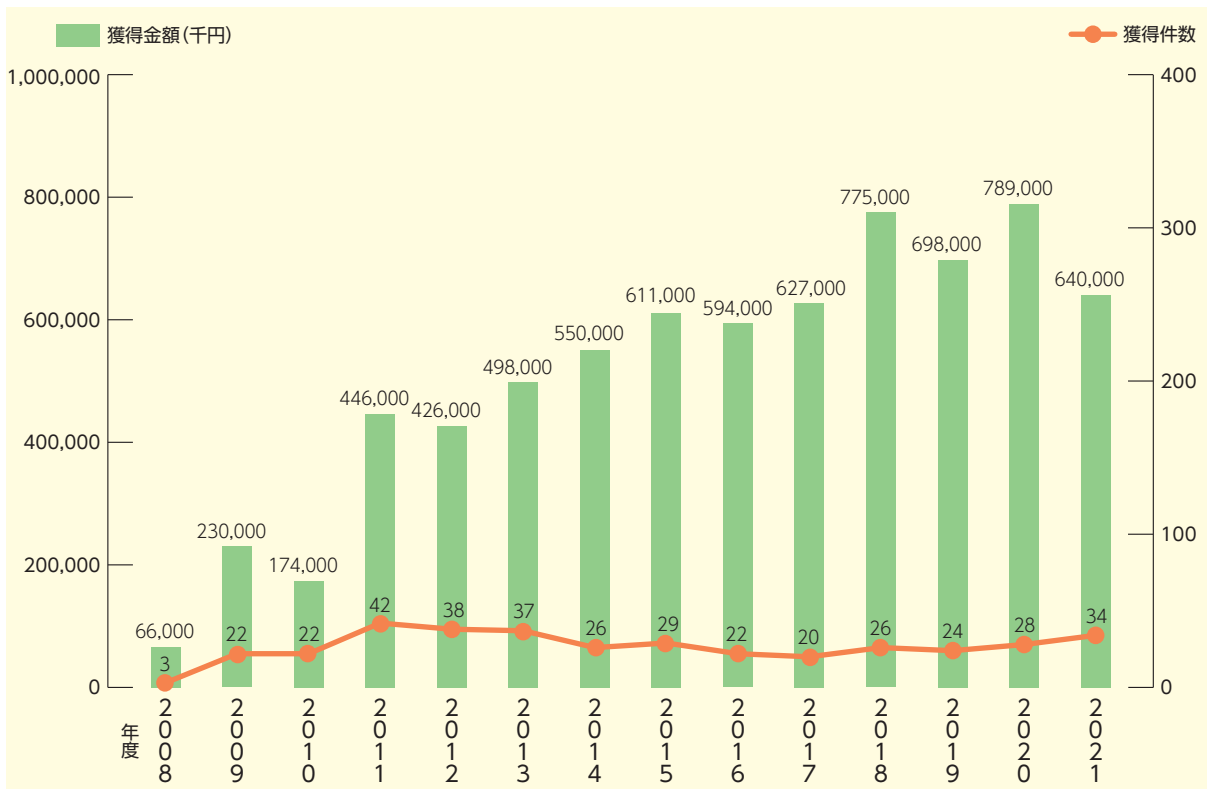
注2 知事選後の6月補正予算（肉付け予算）計上分を含む（2022年を除く）

注3 運営費交付金は、北部医療センター附属病院化後で、2016年まで法人化前の償還負担分を含む

科学研究費(文部科学省・厚生労働省)の獲得状況



科学研究費以外の外部資金の獲得状況

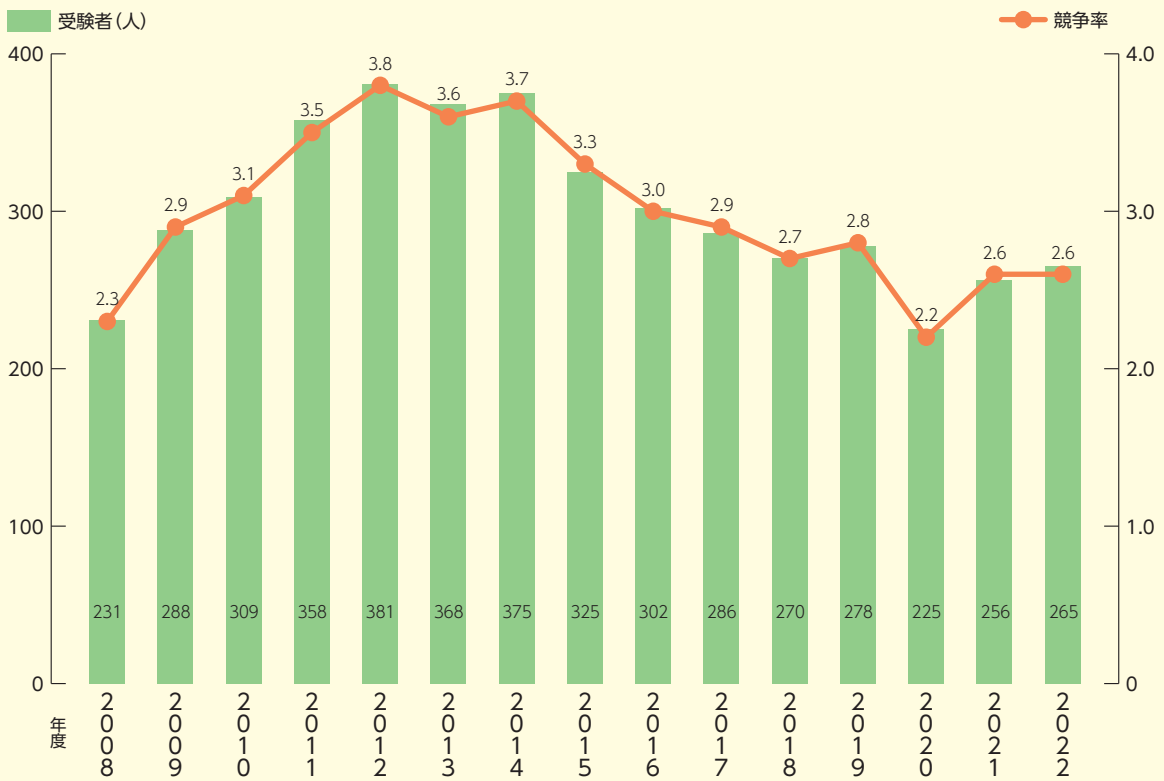


注 「科学研究費以外の外部資金」

日本医療研究開発機構 (AMED) ・ 科学技術振興機構 (JST) 等の公的資金のほか、京都府・京都市からの補助金などを含んだ研究助成の外部資金です。

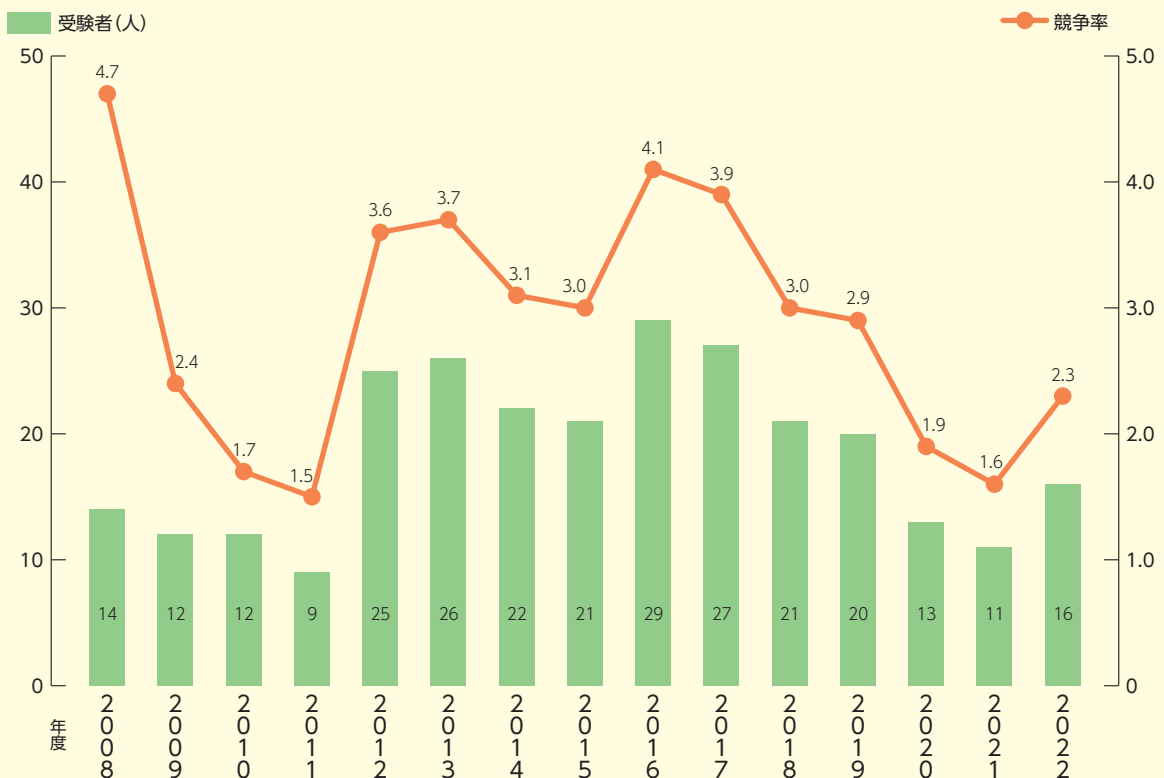
入学試験受験者数・競争率の推移

1. 医学科一般入試



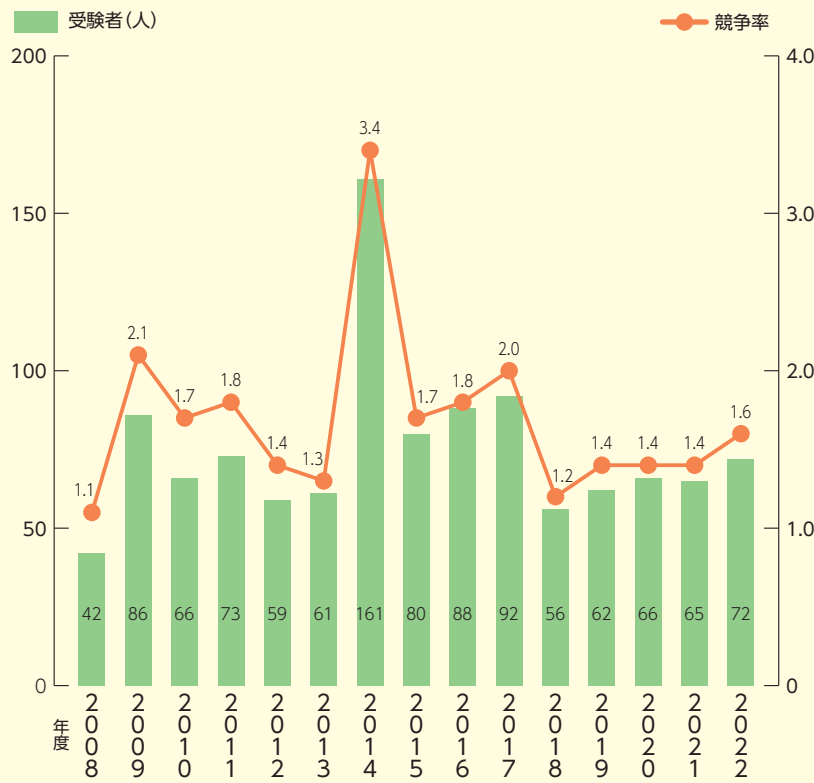
*募集定員：100人

2. 医学科推薦入試



*募集定員：2008年3人、2009年5人、2010年～7人

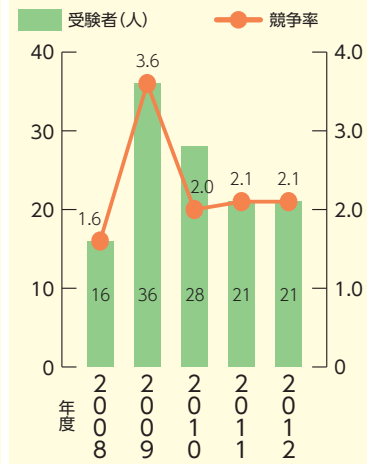
3. 看護学科一般入試（前期）



*募集定員：2008年～2012年40人、2013年～45人

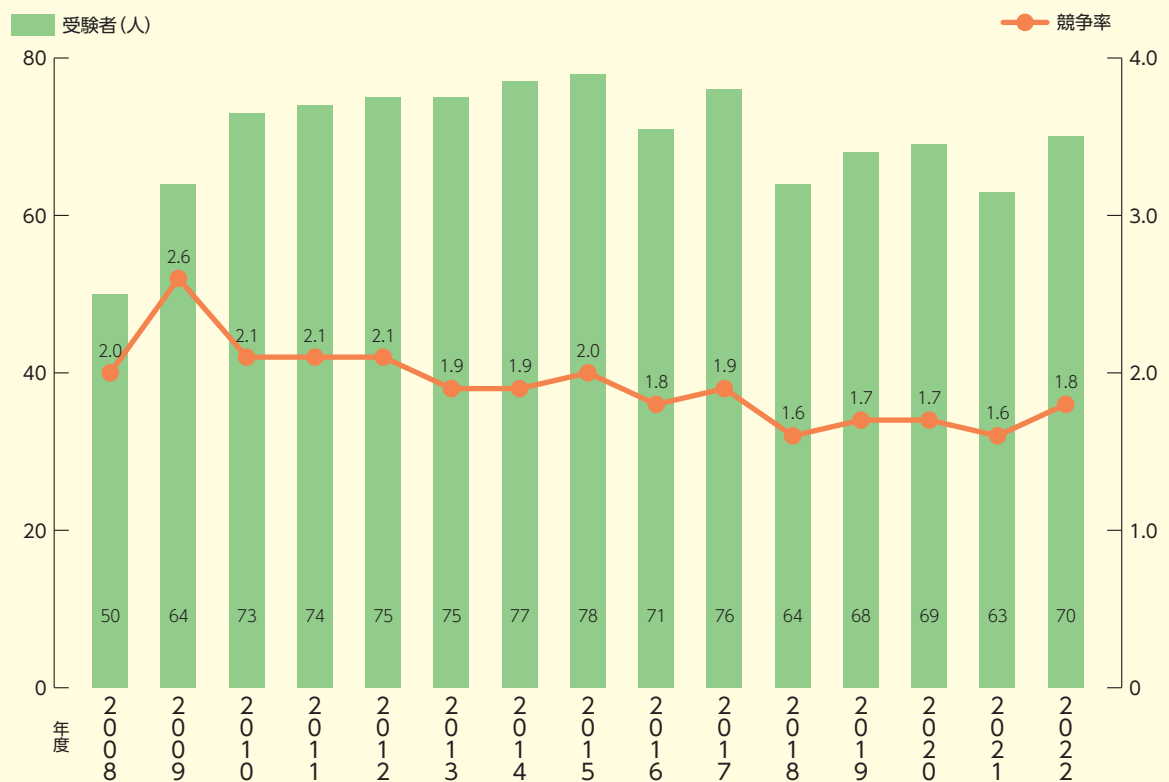
（後期）

注 2012年度入試で終了



*募集定員：10人

4. 看護学科推薦入試



*募集定員：2008年～2009年25人、2010年～2012年35人、2013年～40人

「京都府立医科大学機能整備計画」について

本学は、教育基本法により、学校教育法に定める大学として医学及び看護学に関する知識及び技能を授け、有能な医師、看護師、保健師及び助産師となるために必要な教育を施すとともに、医学及び看護学の深奥を究めることを目的としている。

令和2年度に、大学及び附属病院の将来を見据えて目指すべき方向を検討し、施設整備の基本的な考

え方を示した「京都府立医科大学施設整備構想」を策定した。

本計画は、これを踏まえて、機能整備のための基本的な計画の検討を、令和3年度に実施したものであり、今後の設計等につなげる本学としての考え方を示すものである。

1 整備方針

(1) 整備方針

本学は、150年前、府民の浄財により栗田口青蓮院内に京都療病院として産声を上げて以来、「世界トップレベルの医学・医療を地域へ」を理念に、府民に愛され信頼される医療人を育む大学・附属病院として歩み続けてきた。

この歴史と伝統を現在の地で永続し、活動を止めることなく(サステナブルな)、人や社会、環境などに優しい(エシカルな)大学・附属病院に再構築していくため、基本構想の「5つのコンセプト」及び「基本スタンス」を踏まえ、機能整備計画を策定する。

① 整備に向けた5つのコンセプト

- 現在(いま)の「地」で永続できる施設計画
 - ・ 将来の建替用地の確保
 - ・ 患者・学生・教職員のアメニティ向上
 - ・ 隣接用地の活用による機能の高度化
 - ・ 府民に開かれた施設の充実
- 世界トップレベルの医学・医療の更なる発展
 - ・ 特定機能病院として高度な医療の推進
 - ・ 洛中アライアンス・北部医療センター等関係病院との機能分担と連携の強化
 - ・ AI・IoTを活用した高度医療・遠隔医療への対応
- 歴史と伝統の継承と更なる発展
 - ・ 府立医大のブランド力を高める魅力ある施設整備
 - ・ 「診療・教育・研究」の強固な連携
 - ・ 京都御苑、鴨川に隣接する京都随一の景観

を活かした施設整備

- 時代の変化への機敏な対応
 - ・ 新興感染症への対応と備え、DXの推進、働き方改革への着実な対応
 - ・ AI・IoTの積極的な活用
 - ・ 産官学連携の拠点となるイノベーションセンターの整備
 - ・ 広小路キャンパスのゼロカーボン化 など
- 災害に強い施設計画
 - ・ 地域医療・災害の拠点病院の機能確保

② 施設整備に当たっての基本スタンス

- ▷ 既存建物の活用により新設を抑制し、総事業費を圧縮
- ▷ 関係病院との役割分担を踏まえ、外来機能を縮小し、中央診療機能を早期に整備
- ▷ 整備期間中も災害時に病院機能を維持・確保
- ▷ 学習環境の変化、医療機器の大型化等に柔軟に対応できる建築構造
- ▷ 学びの環境・働く環境の質向上

(2) 本計画によって実現が期待されること

① 地域医療への貢献

- 府域医療の中核病院、特定機能病院としての機能充実
 - ・ 高度急性期病院として必要な重症系病床機能の拡充
 - ・ 手術室機能の拡充と拡張性の確保



【イメージ1】京都御苑上空(清和院御門付近)からの眺め 手前から広小路キャンパス、河原町キャンパス、大文字を望む

- ・ 将来の医療需要、高度医療の集約化を踏まえた病院規模
 - ・ 情報通信機能の拡充による機能の高度化
 - 新興感染症への即応力強化・ゾーン管理の徹底による一般医療への影響抑制
 - ・ 感染症即応病床の整備に加え、ICU 等にも感染症対応病床を整備
 - ・ 専用の入口、専用の搬送経路の確保
- ② 経営の効率化・働き方改革
- 効率的な病院運営
 - ・ 機能の中央化(外来部門の中央処置室、検査の中央化)
 - ・ 機能の共用化(外来部門の診察室の一部共用化(フリーアドレス化))
 - 「アライアンス」による地域医療体制の安定化
 - ・ 病院間での機能分担
 - ・ 関係病院との連携強化による効率的・効果的な医療の提供
 - ・ 高度急性期患者の集約による病床稼働率向上、手術件数の増加
 - ・ 外来機能の規模縮小
- 病院内の教育環境の充実
 - ・ 医療技術向上のための実習生受入環境の整備
 - ・ スキルラボ、セミナー室、カンファレンス室の拡充
 - 働き方改革・病院 DX の推進
 - ・ DX の推進、VR や遠隔医療等への対応
 - ・ PBX・ナースコール・電子カルテの連動などによる情報通信端末の高度化
 - ・ 病棟における重症個室と観察室の整備、スタッフ動線の短縮、見守りやすい病室レイアウト
- ③ 患者満足の上昇・職場環境の上昇
- 療養環境の充実による患者満足の上昇
 - ・ 総室・個室を問わない病室ごとのトイレ整備
 - ・ 眺望にも配慮したデイルーム・病室の整備
- ④ 学生満足の上昇・教育の質の上昇
- 学生主体の広小路キャンパス再整備
 - ・ 学生の居場所、課外活動環境の整備
 - ・ ラーニングコモンズ、PBL(課題解決型学習)などに利用可能な個室の整備

- ・感染症流行時にも対応可能な講義室の整備

○ 病院内の教育環境の充実(再掲)

⑤ 時代の変化への対応

○ 高度急性期医療の維持

- ・ライフラインの多重化、BCP に基づく物流体制の整備
- ・地震への備え(免震構造の採用など)
- ・水害への備え(電気・機械設備の上層階移転など)

○ 感染症対応の強化

- ・一般診療・講義・臨床実習を止めることなく機能継続が可能な施設の整備

○ エシカルなキャンパス(ゼロカーボンキャンパス化)※

- ・再生可能エネルギーの活用、創エネの推進と環境意識の醸成
- ・広小路キャンパスにおけるカーボンニュートラル実現
- ・超高齢社会に適合したユニバーサルデザインの導入、ダイバーシティ対応 など

○ 周辺景観と調和した都市景観軸の形成

- ・大文字の眺望を意識し、周辺の景観と調和した東西軸の整備
- ・鴨川の緑地と一体となった南北軸の整備

○ 教職員の職場環境の向上、ネットワーク環境の整備

- ・事務部門における DX の推進
- ・事務スペースの適正規模での確保
- ・セキュアで高速なネットワーク環境の整備
- ・職員アメニティ、福利厚生施設の充実

○ 交通アクセスの適正化

- ・自動車利用の適正化と自動二輪・自転車駐車場の適正配置
- ・来院者用駐車場の適正規模確保
- ・公共交通利用の促進を踏まえたバス待ち環境の整備

○ 可変性の高い施設

- ・利用方法の変化に柔軟に対応できるスケルトン・インフィル形式の採用

○ 整備期間中の大学・病院機能の継続性確保

- ・基礎研究・臨床研究の継続性確保、臨床研究中核拠点申請の取組
- ・関係病院との機能分担による外来等診療機能の維持・確保

※ エシカル(ethical)とは、「倫理的」「道徳的」という意味の形容詞。環境だけではなく、人や社会、地域という自分たちを取り巻く全てのものに対して、多くの人が考える良識に従って考えよう、行動しようという概念。

⑥ 総事業費の抑制・経営環境の向上

○ 既存建築物の活用による総事業費の圧縮

- ・既存建物の活用により新設を抑制
- ・体育館敷地等における施設規模を適正化
- ・仮移転対象を最小限に抑え移転・改修費用を抑制

○ 高度急性期を担う特定機能病院の機能を高め、収益構造を改善

- ・手術室の増室、機能高度化による医業収入の増加
- ・ICU等の重症系病床の増床及び効率的運用による手術件数の増加、手術室や一般病床の稼働率向上
- ・病棟構造(病床数・移動距離)の見直しによるスタッフの生産性向上
- ・病棟におけるベッドコントロールの効率化
- ・附属病院経営戦略プランに基づく医業収支の改善

○ 関係病院との機能分担・医療資源の効率化

- ・病院間の機能分担に基づく医療機器の導入
- ・外来患者数の適正化や遠隔医療の導入による医師の働き方改革の促進

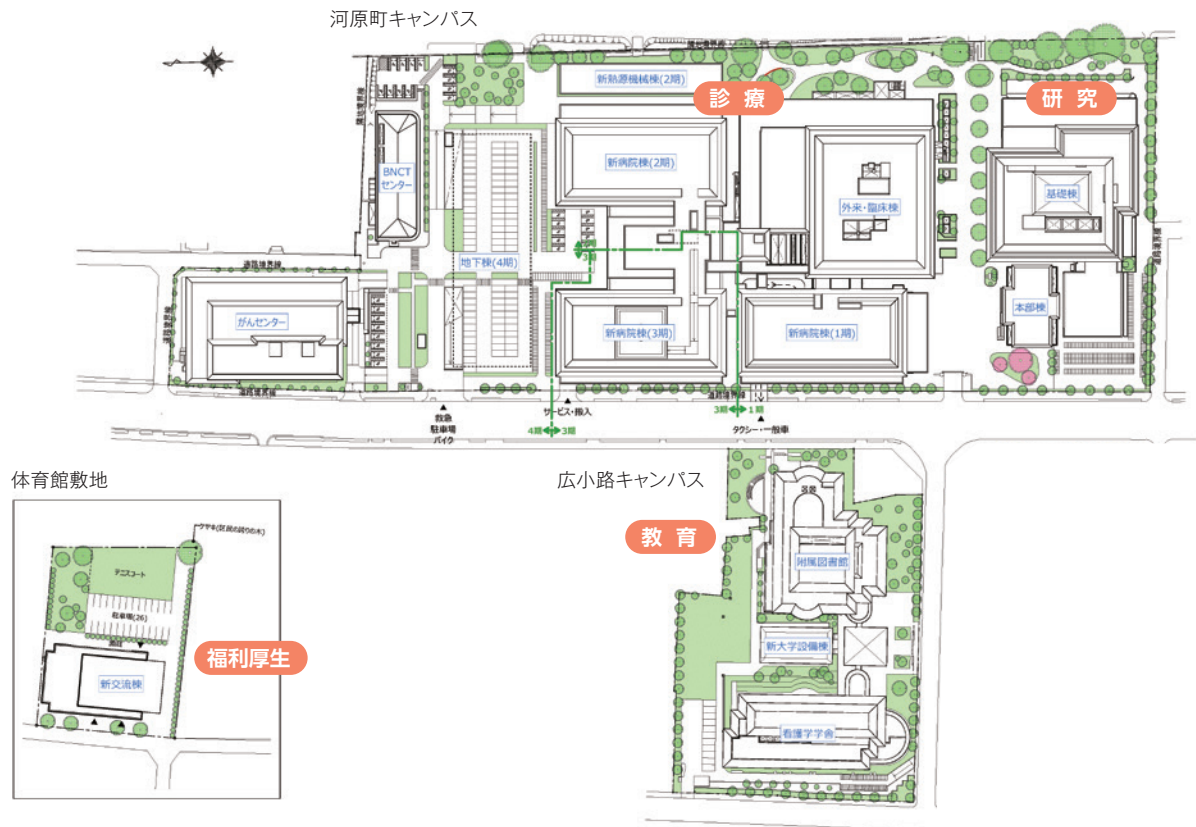
2 施設整備計画(案)

(1) 機能配置

- ▷河原町キャンパスでは、診療機能を拡充するため、教育機能の広小路キャンパス・下鴨キャンパスへの再配置を行う。
- ▷広小路キャンパスでは、教育機能及び学生の課

外活動の充実を進める。

- ▷大学の顔としての本部機能は集約し、産官学連携による研究機能の充実も進める。
- ▷体育館敷地では、院内保育や健康増進など福利厚生機能の充実を進める。



(2) 施設計画等

① 施設計画

○ 河原町キャンパス

- ・既存の外来診療棟の西側及び北側に隣接して新病院棟を配置し、階高を確保し地上7階・地下1階建てとする。外来診療棟1階～4階の外来部門(診察、検査)と密接に連携できるように1階～4階に中央診療部門を配置し、病棟は主に5階～7階に配置して既存施設と新病院の医療機能が一体化するように整備する。

- ・手術室及びICU・PICUを同一フロアに整備する。
- ・河原町通に面して車寄せ・主玄関を設ける。レストラン・コンビニなどの利便施設は、誰もが使いやすいように、車寄せ、河原町通、大学正門広場に面して設ける。
- ・新病院北面には北玄関を設け、駐車場、永守記念最先端がん治療研究センター、ロームBNCTセンターの利用者の便を図る。両センターとは、地上部の通路及び地下棟内の歩行者通路によって連絡する。また、業務時間

外出入口、救急窓口、感染対応窓口など、夜間利用がある部門を北面側に集約配置する。

- ・スキルスラボ、卒後臨床研修センターなどを拡充し、病院内の教育環境の充実を図る。
- ・臨床系教室は将来的に臨床医学学舎に集約する。
- ・府指定文化財である本部棟前の東西軸は、大文字の眺望を活かしながら本学の歴史を感じさせる空間として整備する。
- ・水害に備え、電気室を上層階に、熱源機械室を上層階に又は別棟で整備する。

○ 広小路キャンパス

- ・感染症流行時にも対応可能な大人数が収容できる講義室を整備する。
- ・学生の課外活動を充実させるスペースや少人数教育に対応した諸室を整備する。
- ・電気・熱源供給設備は、供給効率を考慮して附属図書館と看護学学舎の間に配置し、南側には多目的ホールと2施設の玄関をつなぐ歩廊を設け、一体化する。
- ・水害に備え、電気室は2階に整備する。

○ 体育館敷地

- ・体育館敷地には福利厚生機能を配置し、十分な緑化によって鴨川からの景観に配慮する。

② 景観計画

「鴨川と御苑をつなぐみどりあふれるキャンパス」

▷ 京都御苑からつながる緑の軸を連続させ、鴨川の自然と調和する、みどりあふれるキャンパスを創出する。

▷ 東西軸はキャンパスの近景から遠景への伝統的眺望(大文字の眺望景観)を保全するためのオープンスペースとする。

▷ 南北軸は、既存樹木を保全しつつ生垣を配置し、敷地内には自然な配植の緑地帯と小径を設け、鴨川の緑地空間と一体となったナチュラルコリドールを創出する。

▷ 河原町通沿いは街路樹と一体となった統一感

のある街並みを創出する。

③ ゼロカーボンキャンパス化

▷ 広小路キャンパスでは、高効率・省エネルギー技術を導入するとともに積極的に再生可能エネルギーを利用したシステムとし、エネルギー消費を抑え環境に配慮した計画とする。

▷ カーボンニュートラルへの取組として、建物の木質化や様々な省エネ手法などを用いた計画とする。

(3) 施設の安心と安全

① 感染症への備え

▷ 第一種感染症指定医療機関としての一類感染症への対応から五類感染症まで、段階的に感染症に対応できる計画とする。

▷ 感染症対応病床を設け、専用のエレベータにより感染症専用入口から直接搬送できる計画とする。

▷ 感染拡大時には、ICUの一部を区画して感染症対応エリアとし、専用のエレベータにより感染症専用入口から直接搬送できる計画とする。

▷ 前室付きの感染症病室や陰陽圧切替え可能な空調設備を備えた病室を必要に応じて設ける。

② セキュリティ

▷ 利用者の属性や機密度に応じてセキュリティレベルのゾーニングとセキュリティラインを設定し、用途や場所に応じたセキュリティレベルを確保する。

▷ セキュリティ管理の具体的な手法は、現況の整備内容を考慮して適切な機器システムを導入し、運用と管理が容易なものとする。

③ 大地震への備え

○ 構造計画

- ・新病院棟は耐震グレードI類、免震構造とする。



【イメージ2】鴨川（荒神橋付近）からの眺め 右岸に府立医科大学、奥に北山の山並みを望む



【イメージ3】河原町通側から 左から3期棟、1期棟、臨床医学学舎（奥）、基礎医学学舎（奥）、本部棟が並ぶ



【イメージ4】広小路キャンパス 附属図書館と看護学学舎の間に新大学設備棟を整備

- ・新病院棟(1期)は独立した構造とする。
- ・新病院棟(2期)と(3期)は一体構造とし、(2期)仮使用時には(2期)が独立して構造安全性を有しているものとする。

○ 電気設備計画

- ・インフラ停止時や保守時においても機能停止のできない施設であるため、無停電電源設備、非常用発電機、系統の二重化、バイパス構成の採用により無停電または停電時間の短縮を図る計画とする。
- ・信頼性・省エネ性を重視するとともに防災上の面から不燃化、難燃化を考慮した機器を採用する。

○ 機械設備計画

- ・停電や故障の場合でも空調が停止できない系統には、機器の二重化、電源の発電機対応などを行うことで安全性向上を図る。
- ・災害時の水資源確保・ランニングコスト削減を踏まえ井水を主水源とし、バックアップとして市水を引込む。

④ 水害への備え

- ▷ 熱源機械設備は上層階に又は別棟で整備することで水害リスクに対応する。
- ▷ ゲリラ豪雨や大水害への対策として、出入口や重要部門外周に止水設備を設け、重要な診療機器(放射線装置など)やエレベータ等の基幹インフラを守る。
- ▷ 電気重要設備は2階以上に設置する計画とする。

(4) 工期毎の主な整備内容(本計画策定時点の想定)

① 第1期棟

基本設計着手後およそ6~7年後を目途に整備
重症系病床(ICU・PICU)、ハイブリッド手術室、緩和ケア病棟

② 第2期棟

基本設計着手後およそ9~10年後を目途に整備

手術室、重症系病床(SCU・NICU・GCU)、
感染病床、スキルスラボ・卒後臨床研修センター・カンファレンスルーム(教育機能の充実)

③ 第3期棟

基本設計着手後およそ13~14年後を目途に整備
手術室、重症系病床(CCU・HCU・MFICU)

(5) 経営環境

① 基本的な考え方

▷ 本計画の総事業費は約750億円を見込み、その実施に当たっては「機能の整備」と「運営の改善」の両輪で持続可能な経営環境を構築する。整備期間中も運営の改善を継続することにより、収益構造を改善し収入増を図る。

② 機能整備による効果

○ 機能強化のポイント

- ・重症系病床は、第1期にICU及びPICUを、第2期にSCU、NICU及びGCUを、第3期にCCU、HCU及びMFICUを整備する。
- ・手術室は第3期に整備が完了し、一般病床入院患者の手術件数が大幅に増加する。

○ 整備完了後の経営状況

- ・重症系病床の増床及び手術室の増室により収入増を図るとともに、手術室の運用改善による手術件数の増加、重症系病床の増床に伴う入院患者の増加により収入増を見込む。
- ・一方、支出では、給与費(重症系病床の増床及び病棟数の増加による医師・看護師等の増員)、医薬材料費(主に入院収益増のため)及び減価償却費(新たな投資のため)が増加することから、経営状況は一時的に悪化するものの、整備完了後は大幅に改善すると想定される。

年表

西暦	和暦	月	出来事	社会・経済のうごき
1865	慶応元	—	新宮涼閣・明石博高(あかしひろあきら)らが医学研究会を発足	坂本龍馬が日本初の会社、亀山社中を設立
1871	明治4	10	明石の依頼を受けた禅林寺・東山天華、願成寺・与謝野礼巖、慈照寺・佐々間雲巖が発起人となり病院建設を嘆願 府が療病院建営の告諭	郵便制度開始 廃藩置県
1872	明治5	9	初代外国人医師ヨンケルが木屋町の仮療病院で診療と医学教育を開始	学制公布 『学問のすすめ』刊行
		11	「京都療病院新聞」(不定期)創刊 粟田口青蓮院内に仮療病院を設け、患者の治療を行うかたわら医学生を教育	
1873	明治6	5	『京都療病院日講録』(ヨンケルの解剖学講義の口述書)創刊	徴兵令公布
1874	明治7	1	仮療病院解剖所で初の病理解剖	民撰議院設立建白書提出
1875	明治8	4	上京区梶井町で京都療病院・医学校の新築工事起工。府民が運砂(すなもち)と称して地ならしに参加	樺太・千島交換条約締結
		7	南禅寺方丈に仮癲狂院(仮療病院管理)を設置	
1876	明治9	3	マンスフェルトが療病院教師に就任	廃刀令
		5	半井澄が初代療病院長に就任	
1877	明治10	8	ショイベが療病院教師に就任 仮療病院解剖所で初の篤志解剖	西南戦争勃発
1879	明治12	5	萩原三圭が京都療病院医学校初代校長に就任	沖縄県設置
		9	医学予科校・京都療病院医学校を梶井町に移転 河原町広小路の現在地に京都療病院医学校が竣工	
1880	明治13	7	現在地の上京区河原町通広小路上る梶井町に療病院を移転	薬品取扱規則公布。注意薬、毒薬、劇薬を規定
		12	療病院碑完成	
1882	明治15	5	猪子止戈之助(いのこしかのすけ)が京都府医学校一等教諭に就任	売薬印紙税規則制定
		11	文部省達第4号医学校通則に準拠し、甲種医学校に認定	
1883	明治16	10	京都府医学校の卒業生に無試験で医術開業免状下付	大日本製薬会社設立。製薬事業を開始
1887	明治20	1	猪子止戈之助が京都府医学校長兼京都府立療病院長に就任(1898年7月まで)	福原有信らが東京薬舗会設立。翌年、東京薬剤師会に改称
1889	明治22	4	本校の附属として産婆教習所を設置	薬品営業並薬品取扱規則公布

西暦	和暦	月	出来事	社会・経済のうごき
1896	明治29	4	附属看護婦教習所を設置	第1回オリンピックがアテネで開催される
1900	明治33	5	島村俊一が京都府医学校長に就任	副腎エキスからアドレナリンが発見される
1901	明治34	9	京都府立医学校に改称	ノーベル賞創設
1903	明治36	6	専門学校令により京都府立医学専門学校(4年制)に改称。附属療病院に改称 専門医学令により京都府立医学専門学校となる	ライト兄弟が動力有人飛行に成功
1907	明治40	3	大日山墓地の一角を借り入れ附属墓地とし「学用患者之墓」を建立	小学校令が改正され、義務教育が6年間となる
1908	明治41	11	開校30周年記念式典を挙行	昆布のうま味がグルタミン酸ソーダによるものだと確認される
1919	大正8	4	全国校友大会が基督教青年会館(三条通柳馬場東入)で開かれ、陸格期成同盟会結成	ベルサイユ平和条約調印
1921	大正10	10	大学令により京都府立医科大学を設置し、同時に予科を開設	メートル法公布
		11	創立50周年記念式典・大学昇格祝賀式典を挙行。創立記念日を11月1日に制定(これまでは京都療病院医学校が発足した4月16日) 予科の校章を制定	原首相が東京駅で刺殺され、内閣総辞職
1922	大正11	5	大將軍鷹司町に予科校舎が竣工	日本農民組合設立
		7	本大学附属病院の分院として京都市北区大將軍鷹司町に花園分院を設置	日本経済連盟会設立
		11	予科開校・花園分院開院祝賀式典を挙行	エジプトでツタンカーメンの墓を発見
1923	大正12	4	京都府立医科大学開学式を挙行	関東大震災
1925	大正14	4	陸格記念碑除幕式を挙行	ラジオ放送開始
1926	大正15	4	学友会の京都医学図書館が大学に移管され中央図書館となる	大正から昭和に改元
1929	昭和4	5	中央図書館(1階教室、2階図書館、3階階段教室など)が竣工	ニューヨーク株式大暴落、世界恐慌始まる
1938	昭和13	5	大日山墓地の「学用患者之墓」を「俱会一処」に改刻、「研究動物諸霊供養塔」を建立	ヘレン・ケラー来日
1944	昭和19	4	専門学校令による女子専門部を大学に付置 京都市伏見区村上町財団法人伏見病院を附属女子専門部の附属病院として寄附を受ける	学徒勤労令・女子挺身勤労令公布 家庭用の砂糖、配給停止 東南海地震
1946	昭和21	4	厚生女学部を大学に付置	日本国憲法公布

西暦	和暦	月	出来事	社会・経済のうごき
1949	昭和24	4	保健婦助産婦看護婦法の制定に伴い、甲種看護婦学院を大学に付置	湯川秀樹がノーベル物理学賞受賞、日本人初
1950	昭和25	6	西構(河原町通広小路下ル、看護婦寄宿舍跡及び隣接地)に生理学・衛生学・薬理学教室などが竣工	朝鮮戦争勃発
1951	昭和26	3	予科を廃止 附属女子専門部を廃止し、附属女子専門部の附属病院を大学の附属病院に改称	9電力会社発足、電力再編成完了 民間ラジオ放送開始
		4	附属乙種看護婦学院(2年制)を附属伏見病院に設置	日米安全保障条約調印
		5	附属乙種看護婦学院を大学に付置	
1952	昭和27	2	学校教育法による新制大学を設置	皇居前広場でメーデー事件発生
		4	新制京都府立医科大学(4年制)が発足 附属甲種看護婦学院を附属看護婦学院に、附属乙種看護婦学院を附属准看護婦学院にそれぞれ改称	日本電信電話公社(現・NTT)発足 日本、国際通貨基金(IMF)に加盟
		11	創立80周年記念祝賀式典を挙行	
1953	昭和28	3	保健婦助産婦看護婦法により附属厚生女学部を廃止	NHK、テレビの本放送開始 吉田茂内閣不信任案可決、衆院バカヤロー解散
		10	附属伏見病院を附属病院の分院として附属病院伏見分院に改称	
1955	昭和30	3	学校教育法の改正により本大学に医学進学課程を設置し、校舎は元予科校舎を充当	日本、GATTに正式加盟 「神武景気」始まる(～1957年中頃)
		8	『京都府立医科大学八十年史』刊行	
1957	昭和32	3	本大学に大学院(医学研究科)を設置 附属准看護婦学院を廃止	原子力研究所の原子炉に原子の火ともる 100円硬貨発行
1961	昭和36	3	旧制医科大学(1918年勅令第388号大学令による)を廃止	ソ連が人類初の有人宇宙飛行に成功
		4	外来診療棟第2期工事完成	東ドイツがベルリンの壁を構築
1963	昭和38	9	外来診療棟第3期工事完成	日米間テレビ宇宙中継受信実験に成功
1964	昭和39	4	附属看護婦学院を附属看護学院に改称	東京オリンピック開幕
1967	昭和42	9	附属病院花園分院を本院内に移転	公害対策基本法公布
1969	昭和44	2	学園紛争が激化し学生会が無期限ストライキに突入、9月から授業再開	米アポロ11号が人類初の月面着陸
1971	昭和46	6	医療センターを設置	環境庁発足、公害行政の一元化図る
		10	臨床医学学会完成	米ドル防衛策でダウ暴落。ドル・ショック

西暦	和暦	月	出来事	社会・経済のうごき
1972	昭和47	8	花園学舎竣工	沖縄本土復帰
		11	創立100周年記念式典を挙	日中国交回復
1973	昭和48	7	図書館ニュース「橘井」創刊	円、変動相場制移行で急騰
		10	公衆衛生学教室を設置	第1次石油危機
		11	花園学舎体育館完成	石油危機で紙などの物資不足
1974	昭和49	11	京都府立医科大学創立100周年記念会館竣工式、余剰金で花園学舎に藤棚、教養図書整備、附属図書館に学生用図書を整備	佐藤栄作前首相、ノーベル平和賞受賞
1975	昭和50	4	脳神経外科学教室を設置	第1回先進国首脳会議(サミット)
1976	昭和51	6	附属病院伏見分院の改築整備に伴い診療科の一部及び入院施設を休止	鹿児島で国内初の5つ子誕生
		9	附属看護学院を附属看護専門学校に改称	南北統一し、ベトナム社会主義共和国誕生
1977	昭和52	4	附属病院伏見分院第1期工事完成	和歌山県有田市で集団コレラ発生
		8	附属看護専門学校校舎第1期工事完成	日本初の静止気象衛星ひまわり1号打ち上げ
		11	与謝の海病院竣工式	巨人・王貞治が本塁打世界最高記録を達成
1978	昭和53	3	附属看護専門学校寄宿舎完成	新東京国際空港(成田空港)開港
1979	昭和54	2	京都府立医科大学整備構想決定	第2次石油危機
		3	附属看護専門学校校舎第2期工事完成	東京サミット開催
1981	昭和56	3	立命館大学広小路学舎・体育館買収	神戸ポートアイランド博覧会開幕
1982	昭和57	3	附属病院中央診療棟・A病棟完成	500円硬貨発行
		11	附属小児疾患研究施設(京都府こども病院)完成	東北・上越新幹線開業
1983	昭和58	4	附属看護専門学校に助産学科を設置	東京ディズニーランド開園
1985	昭和60	4	附属病院伏見分院を附属病院附属伏見診療所に改称	公社事業の民営化。NTT、JT 発足
		9	附属病院病棟第1期(C病棟・D病棟)工事完成	日航ジャンボ機墜落事故。520人死亡
1987	昭和62	1	附属病院外来診療施設改修工事完成	国鉄の分割・民営化でJR11法人発足
		4	臨床検査医学教室を設置	利根川進がノーベル医学生理学賞受賞
1989	昭和64 /平成元	4	附属看護専門学校創立100周年記念式典挙	昭和天皇崩御、平成に改元
		8	臨床講義棟・附属病院病棟第2期(B病棟)工事完成	消費税3%導入

西暦	和暦	月	出来事	社会・経済のうごき
1990	平成2	11	附属脳・血管系老化研究センターを設置	国際花と緑の博覧会(花の万博)開幕
1991	平成3	5	病棟全面稼働	経済企画庁「いざなぎ景気」超えと発表
		7	附属病院に老人性痴呆診断センター開設	骨髄バンク発足
1992	平成4	2	附属図書館・合同講義棟完成	東海道新幹線「のぞみ」導入
		11	創立120周年記念式典を挙行	日経平均1万5,000円割れ、バブル崩壊
		12	附属小児疾患研究施設(京都府こども病院)開設10周年記念式典を挙行	都市銀行など21行の不良債権激増と発表
1993	平成5	3	医療技術短期大学部校舎完成	初のプロサッカーJリーグ開幕
		4	医療技術短期大学部開学	冷害でコメ不作。政府は緊急輸入を決定
1995	平成7	1	阪神・淡路大震災発生、芦屋市へ医療支援団派遣(1月18日～3月31日 延べ311人派遣)	阪神・淡路大震災 地下鉄サリン事件
		3	附属病院屋上ヘリストップ完成	
1996	平成8	4	医療技術短期大学部に専攻科を設置 特定機能病院の承認	堺市でO-157の集団食中毒発生
		6	基礎医学学舎第1期工事完成	輸入血液製剤によるHIV感染死問題で関係者逮捕 国連、核実験全面禁止条約を採択 初の小選挙区比例代表並立制で総選挙
1997	平成9	3	附属病院附属伏見診療所を廃止	消費税5%に引き上げ
		11	創立125周年記念式典を挙行	温暖化防止京都会議開催
1998	平成10	9	附属病院駐車場整備	長野冬季オリンピック開催
1999	平成11	3	基礎医学学舎第2期(第1工区)工事完成	NTTドコモが「iモード」の通信サービス開始
		4	心臓血管外科学教室を設置	厚生省、低用量ピルを医薬品として承認
		9	第1外科学教室、第2外科学教室を消化器外科学教室、移植・呼吸器・内分泌外科学教室に再編。診療ディビジョン実施(外科)	民間核燃料処理工場で初の臨界事故発生
		12	診療ディビジョン実施(内科)	コンピュータ2000年問題で警戒態勢
2000	平成12	4	移植・呼吸器・内分泌外科学教室、心臓血管外科学教室を移植・内分泌外科学教室、心臓血管・呼吸器外科学教室に再編	介護保険制度施行

西暦	和暦	月	出来事	社会・経済のうごき
2001	平成 13	3	基礎医学学舎第2期(第2工区)工事完成 附属脳・血管系老化研究センター開設10周年記念講演会開催	中央省庁再編、1府12省庁制へ 大阪市此花区にUSJ開園
		11	医療センター30周年記念式典開催 附属病院オーダリングシステム稼働(入院)	狂牛病感染疑いの牛、国内初発見 米で同時多発テロ発生
2002	平成 14	1	附属病院オーダリングシステム稼働(外来)	学校が完全週休2日制に。ゆとり教育開始
		3	下鴨グラウンドを整備	日韓サッカーW杯開幕
		4	医療技術短期大学部を医学部看護学科に改組	デフレ不況、東京株式が9,000円割る
		9	附属病院に地域医療連携室を設置	北朝鮮拉致被害者5人帰国
2003	平成 15	3	附属病院外来診療棟等整備構想を策定	日本郵政公社発足
		4	大学院医学研究科を再編 医学科教室の一部を大講座化 分子医科学教室ゲノム医科学部門を設置 リエゾンオフィスを設置	国立大学法人法成立、10月施行 東海道新幹線に品川駅誕生 米国で狂牛病(BSE)発生し、輸入停止
		5	国際学術交流センターを設置	新型肺炎(SARS)が中国などで大流行
		4	附属病院に卒後臨床研修センターを設置	インドネシア・スマトラ島沖で大地震発生
		1	寄附講座(臓器応答探索医学講座)を設置(～2014年3月)	愛・地球博(愛知万博)開幕
2005	平成 17	3	医療技術短期大学部を廃止	JR福知山線で脱線事故、107人死亡
		11	内科学教室 内分泌・糖尿病・代謝内科学部門、膠原病・リウマチ・アレルギー内科学部門を内分泌・免疫内科学部門に、循環器内科学部門、腎臓・高血圧内科学部門を循環器・腎臓内科学部門に、血液内科学部門を血液・腫瘍内科学部門に再編	道路公団が民営化、高速道路会社6社発足
2006	平成 18	3	(財)日本医療機能評価機構による病院機能評価の認定取得	耐震強度偽装事件 日銀が量的緩和解除、ゼロ金利解除
		8	都道府県がん診療連携拠点病院に指定 寄附講座(腫瘍薬剤制御学講座)を設置(～2013年7月)	携帯電話番号ポータビリティ制度開始
		10	附置研究センター(研究開発センター)を設置 附置研究センター(予防医学センター)を設置	景気拡大、いざなぎ景気を超える

西暦	和暦	月	出来事	社会・経済のうごき		
2007	平成 19	1	附置研究センター（がん征圧センター）を設置	宮崎県で鳥インフルエンザ発見、拡大		
		4	寄附講座（予防健康医学講座）を設置（～2010年3月） 大学院医学研究科修士課程及び大学院保健看護研究科修士課程を設置	第1回東京マラソン開催 日本郵政公社が民営化		
		11	創立135周年記念式典を挙行 寄附講座（鏡視外科光学講座）を設置（～2012年10月）	75歳以上の推計人口が全人口の1割を超える		
2008	平成 20	1	附属病院総合医療情報システム稼働 附置研究センター（再生医療・細胞治療研究センター）を設置	京都議定書の約束期間開始 薬害肝炎救済法成立		
		4	京都府公立大学法人設立 分子診断・治療センターを設置 小児科学教室及び附属小児疾患研究施設内科部門を大講座制小児科学教室に再編し、循環器・腎臓小児科学部門、血液・腫瘍・免疫小児科学部門、神経・内分泌代謝・新生児小児科学部門を設置	中国産輸入冷凍餃子から農薬検出 東芝がHD-DVDから撤退を発表 後期高齢者医療制度開始（75歳以上）		
		5	寄附講座（がん免疫細胞制御学講座）を設置（～2017年3月）	アイフォーン（iPhone）、日本で発売 北京オリンピック開幕		
		7	がんプロフェッショナル養成センターを設置 寄附講座（消化器先進医療開発講座）を設置（～2016年3月）	三笠フーズが事故米を食用と偽り転売 米証券大手リーマン・ブラザーズ経営破綻		
		8	肝疾患診療連携拠点病院の指定 産学公連携戦略本部を設置	米大統領選でオバマ氏が当選		
		9	外来診療棟等（第1期）工事完成	商品価格急騰、原油1バレル＝147ドルに		
		11	疼痛緩和医療学講座を設置 外科学教室に小児外科学部門を設置			
		4	脂肪由来細胞再生医療室を設置 第一種感染症指定医療機関の指定	定額給付金の支給開始 新型インフルエンザ、国内初確認		
		10	看護実践キャリア開発センターを設置	裁判員裁判開始		
		2010	平成 22	4	附属病院に臨床治験センターを設置 救急医療学教室を設置	肝炎対策基本法施行 上海国際博覧会開幕
				5	組織バンクを設置 総合医療・医学教育学教室を設置	家畜伝染病口蹄疫が宮崎県で大流行
7	男女共同参画推進センターを設置			小惑星探査機「はやぶさ」が地球に帰還		
10	共同研究講座（生体免疫制御学講座）を設置（～2020年3月）			改正臓器移植法施行 東北新幹線全通		

西暦	和暦	月	出来事	社会・経済のうごき
2010	平成22	12	寄附講座(先進循環器病治療学講座)を設置(～2014年11月)	鈴木章、根岸英一がノーベル化学賞受賞
			寄附講座(医療情報通信学講座)を設置(～2014年3月)	
			共同研究講座(生体食品機能学講座)を設置(～2017年3月)	
2011	平成23	1	総合医療・医学教育学講座を設置	中国の2010年GDPが日本を抜き世界第2位に 八百長問題で大相撲春場所中止を決定 東日本大震災、東京電力福島原発事故 九州新幹線が博多ー鹿児島中央間で全通 東京電力管内で、輪番停電(計画停電)実施 サッカー女子W杯ドイツ大会で日本が初優勝 地上デジタル放送に移行(被災3県は翌年3月) タイで大洪水、日本企業にも被害 国連の推計で世界人口が70億人に到達 歴史的円高、一時1ドル=75円32銭
			寄附講座(身体支持制御・骨代謝学講座)を設置	
		3	大学機関別認証評価の基準を達成	
		4	総合情報センターを設置	
			教養教育センターを設置	
			共同研究講座(分子脳病態解析学講座)を設置(～2014年3月)	
		7	病児保育室を設置	
		8	寄附講座(泌尿器先端医療講座)を設置(～2014年7月)	
		9	外来診療棟等(第2期)工事完成	
		10	小児医療センター(旧京都府こども病院)を設置	
			寄附講座(人工臓器・心臓移植再生医学講座)を設置	
11	医療センター40周年記念事業実施			
2012	平成24	1	共同研究講座(先端検査機器開発講座)を設置	2011年の貿易収支、31年ぶりの赤字 復興庁発足 関西電力が原発全基停止 東京スカイツリー開業 ロンドンオリンピック開幕 東京・銀座で初のオリンピックメダリストのパレード実施 山中伸弥がノーベル医学生理学賞受賞
		4	腫瘍分子標的治療学講座を設置	
		7	大学門及び周辺整備事業が竣工	
		8	寄附講座(リウマチ・関節機能制御学講座)を設置(～2017年7月)	
		10	共同研究講座(運動器時間制御学講座)を設置(～2017年9月)	
		11	創立140周年記念式典を挙行	
			附属病院に患者図書室を設置	
			附属病院に局所麻酔手術センターを設置	

西暦	和暦	月	出来事	社会・経済のうごき
2013	平成 25	2	小児がん拠点病院の指定	復興特別所得税の課税導入(2037年まで)
		3	附属病院に入退院センターを設置	天然ニホンウナギが絶滅危惧種に指定
		4	附属北部医療センター(旧京都府立与謝の海病院)開設	政府、TPP 交渉参加を正式表明
			地域医療学教室を設置	10種類の交通系 IC カードが相互利用可能に
			小児整形外科学を設置	東京スカイツリーが地デジ電波送信開始
			寄附講座(薬物応用腫瘍外科学講座)を設置(～2019年3月)	富士山が世界文化遺産に登録
			共同研究講座(バイオイオノミクス講座)を設置(～2018年3月)	2020年五輪開催地が東京に決定
			臨床 IR センターを設置	台風18号上陸。気象庁が初の大雨特別警報発令
		10	寄附講座(在宅チーム医療推進学講座)を設置(～2018年9月)	イチロー選手が日米通算4,000安打達成
		11	医療フロンティア展開学を設置	ソチ冬季オリンピック開幕
		2014	平成 26	1
3	E病棟(旧附属小児疾患研究施設棟)改修工事完成			日本人の海外渡航自由化50周年
4	生物統計学を設置			日本人男性の平均寿命80.21歳、初の80歳超え
	研究開発・質管理向上統合センターを設置			広島市北部豪雨で土石流発生、死者74人
	全人的医療人材育成・研究センターを設置			約70年ぶりにデング熱の国内感染確認
	寄附講座(放射線科診療支援システム開発講座)を設置(～2018年3月)			御嶽山が噴火。戦後最悪の噴火災害に
	寄附講座(分子脳病態解析学講座)を設置			日中首脳会談が約2年半ぶりに実現
4	大学院保健看護研究科を大学院保健看護学研究科に名称変更			日本の手漉き和紙がユネスコ世界無形文化遺産に登録
5	寄附講座(心臓血管低侵襲治療学講座)を設置(～2020年4月)			赤崎勇、天野浩、中村修二の3氏がノーベル物理学賞受賞
	共同研究講座(がん免疫細胞制御学講座)を設置(～2017年3月)			
9	京都三大学教養教育共同化施設(稲盛記念会館)が竣工			
10	リハビリテーション医学教室を設置			

西暦	和暦	月	出来事	社会・経済のうごき
2015	平成27	1	寄附講座(先端的磁気共鳴画像研究講座)を設置(～2017年12月)	日本・オーストラリア経済連携協定発効
			寄附講座(スポーツ傷害予防医学講座)を設置(～2017年12月)	横綱・白鵬が歴代最多優勝記録更新
		3	寄附講座(泌尿器先端医療講座)を設置(～2017年3月)	省エネ住宅ポイント受付開始
			附属病院にハイブリッド手術室完成	北陸新幹線が長野ー金沢間で開業
		4	細胞再生医学を設置	日経平均が一時、2万円台を回復
			保健管理センターを設置	携帯端末のSIMロック解除が義務化
			附属病院に緩和ケアセンターを設置	気象衛星ひまわり8号の運用開始
			共同研究講座(先端技術・医学融合展開講座)を設置(～2018年3月)	京都縦貫自動車道が全線開通
			共同研究講座(リハビリテーション先進医療開発講座)を設置(～2019年3月)	アメリカとキューバが54年ぶりに国交回復
			特任講座(感覚器未来医療学)を設置	スポーツ庁発足
			特任講座(医学フォトニクス講座)を設置	順次、マイナンバーの通知開始
			12	学内保育所を開設
		共同研究講座(長寿・地域疫学講座)を設置		
2016	平成28	1	医療レギュラトリーサイエンス学を設置	日銀、初のマイナス金利を導入
		2	共同研究講座(包括的地域連携緩和医療学講座)を設置	TPP、日米など12カ国が協定に署名
		4	スポーツ・障がい者スポーツ医学を設置	北海道新幹線が新青森駅ー新函館北斗間で開業
			寄附講座(心臓血管血流解析学講座)を設置(～2021年3月)	熊本地震発生
		6	共同研究講座(再生医療研究講座)を設置(～2017年5月)	オバマ米大統領が広島市を訪問
		7	事故・虐待予防システム学、地域保健福祉行政システム学及び地域保健医療管理学を再編し、地域保健医療福祉行政システム学を設置	公職選挙法改正。18歳から投票可能に
		10	小児発達医学及び小児循環器・腎臓学を統合し、小児科学を設置	天皇、生前退位のビデオメッセージを公開
		11	附置研究センター(創薬センター)を設置	大隅良典がノーベル医学生理学賞受賞
			血液・腫瘍内科学から血液内科学に名称変更	

西暦	和暦	月	出来事	社会・経済のうごき
2017	平成 29	4	生殖医療センターを設置 寄附講座(糖尿病治療学講座)を設置	レゴランド・ジャパン開園(名古屋市港区) フィギュアスケート・浅田真央選手が現役引退表明
		6	教養教育センターを廃止し、教育センターを設置 臨床 IR センターを IR 室に改称	東京・上野動物園でジャイアントパンダ「シンシン」が5年ぶりに出産
		11	永守記念最先端がん治療研究センターが竣工	毒性の強い南米原産「ヒアリ」が神戸港で発見
2018	平成 30	3	寄附講座(不整脈先進医療学講座)を設置	台風21号上陸。関西国際空港が一時孤立
		4	附属病院に医療技術部を設置 共同研究講座(臨床 AI 研究講座)を設置 大学院保健看護学研究科博士後期課程を設置	北海道胆振東部地震。道内で大規模停電
		7	共同研究講座(集学的身体活動賦活法開発講座)を設置	2025年万博、大阪で開催決定
		10	創薬医学を設置	東京・豊洲市場が開場 本庶佑がノーベル医学生理学賞受賞
2019	平成 31 /令和元	2	共同研究講座(次世代ホウ素中性子捕捉療法研究講座)を設置	働き方改革関連法案施行
		4	がんゲノム医療センターを設置 分子標的癌予防医学から分子標的予防医学へ名称変更 男女共同参画推進センターからワークライフバランス支援センターへ名称変更 研究開発・質管理向上統合センターを廃止し、大学に研究質管理センターを、附属病院に臨床研究推進センターを設置 地域生涯健康医学を設置 近未来地域医療学を設置	皇太子徳仁親王が天皇に即位。令和に改元 百舌鳥・古市古墳群が世界文化遺産に登録 消費税10%に引き上げ(一部、軽減税率導入) ラグビー W 杯日本大会で日本が初のベスト8に 吉野彰ら3氏がノーベル化学賞受賞
		3	医薬品化学から医系化学へ名称変更 附属北部医療センターがん診療棟が竣工	日本初の新型コロナウイルス感染者発生
		4	緊急事態宣言を受け、教育、研究、診療についての活動指針を策定	イギリスが EU 離脱
2020	令和 2	10	寄附講座(医学・医療情報管理学(疾患別レジストリ担当)講座)を設置	新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言を7都府県(京都府を含む)に発出
		11	寄附講座(運動器加齢制御学講座)を設置	水銀を含む「マーキュロクロム水溶液」製造終了
				大規模イベントの中止、延期が相次ぐ

西暦	和暦	月	出来事	社会・経済のうごき
2021	令和3	3	附属病院にメディカルセンター（循環器センター）を設置	PHS サービス提供終了（一部の法人向け以外）
		4	寄附講座（生体免疫栄養学（太陽化学）講座）を設置 神経内科学から脳神経内科学に名称変更 事務部門を事務局一本化体制に変更	医療従事者にコロナウイルスワクチン接種開始 東京オリンピック開幕 デジタル庁発足
		6	ローム BNCT センターが竣工	米大リーグで大谷翔平が日本人2人目の MVP に選出
		10	大学昇格100周年記念式典を挙行	眞鍋淑郎がノーベル物理学賞受賞
		11	分子病態検査医学から分子病態感染制御・検査医学に名称変更	
		12	附属病院にメディカルセンター（脳神経センター）を設置	
		2022	令和4	4
5	附属病院にメディカルセンター（消化器センター）を設置			改正民法施行。成年年齢が18歳に
11	創立150周年記念式典を挙行			

注) 京都府立医科大学概要「大学の沿革」を参考に作成



TOMI-TOKURIKI



白イ門(徳力富吉郎・画)

創立百五十周年記念誌の編纂にあたって

創立150周年記念誌編纂委員会
委員長 伊東 恭子

2019年初頭、京都府立医科大学創立150周年記念事業の一環として創立150周年記念誌編纂事業が立ち上がり、当時附属図書館長を務めていた私が編纂委員会委員長を拝命することとなった。同年10月30日に開かれた第1回委員会において、「150年という記念すべき本学の歩みを顧み、創立の原点を大切にしつつ輝かしい未来を構想する」を編集の基本方針と決定した。これまでに京都府立医科大学80年史、京都府立医科大学100年史、京都府立医科大学創立125周年記念誌、京都府立医科大学創立135周年記念誌が発刊されており、それらは本学図書館でPDF版として入手可能である。したがって、今回の記念誌編纂にあたっては、①なるべく既刊記念誌との重複記述を避けること、②本学開学時の歴史を科学的に検証すること、③今後半世紀・1世紀後の未来に向けての展望を語ること、④読み物としても楽しめることに重点を置き、目次立て、全体構成案を考えた。

編纂過程で参考にさせていただいた創立125周年記念誌では、創立100周年から25年間の歴史的資料が整理され、正確な記録書となっていた。そこで、本記念誌では、創立135周年以降15年間の記録を重点的に残すことに努めた。顧みれば、この15年間は、大学院重点化後の整備、法人化など大学組織の変革、三大学教養教育共同化、医学教育の72週化に準拠したカリキュラム改革、国際認証取得・医学教育分野別認証評価制度など世界基準に対応した教育変革、社会的にはディオバン事件とその後の本学の研究支援体制の整備、国際学術交流、とりわけアジアへの国際交流展開等、まさに激動の時代であった。加えて、2020年からの新型コロナウイルス・パンデミックに際しては、本学が人々の命を救うためにいかに果敢に戦ってきたかの足跡が刻まれている。

ところで150周年記念事業が契機となり、本学に長らく保管されたまま未調査であった膨大な歴史的資料を対象に詳細な調査が着手されることになった。本学開学をめぐる歴史的記述はこれまで、過去

の記念誌の引用にとどまっていることが多く、空白部分を埋め得る公文書が残されていないなどの課題があった。本学開学の歴史をできるだけ正確に調査・記録し後世に残すことは、本学の歩んできた軌跡を検証し、将来への飛翔に向けた基盤を強固なものにする上で重要である。この調査研究は本学医学生命倫理学/人文・社会科学教室 八木聖弥准教授(現 研究教授)と京都府立大学文学部 小林啓治教授との共同研究として2020年から開始され、その調査結果の概要が本誌に紹介されている。詳細は今後他誌にまとめられる予定であるので、それらをご参照いただきたい。

本記念誌は全体を6部構成とし、創立150周年記念事業として行われた国際シンポジウム、創立150周年記念式典、記念講演、記念祝賀会の内容を第1部に総括した。

第2部の療病院・医学校新史の中で、要をなす本学開学時の歴史的事実の検証は、前述した八木聖弥研究教授らの調査研究の成果によっている。それに続く本学の教育・研究・診療のあゆみでは、主として法人化以降に我々が経験した事件や変革を取り上げ、それぞれに造詣の深い先生方に概要と考察をお纏めいただいた。

第3部はご寄稿として、歴代学長、名誉教授に現役としてご活躍された時代の思い出と未来へのご提言をご執筆いただいた。学友諸氏には懐かしく楽しんでいただけるものと確信する。歴代学長にはポートレートの掲載をお願いした。

第4部の新時代への飛翔では、「未来へのメッセージ」と題して、本学で生まれ育ち、世界に向け発信された偉大な研究業績、本学が未来に継承すべき先進的な教育、臨床、地域貢献について、編纂委員会で議論し、それぞれに相応しい先生方にご執筆をお願いした。未来への提言では、現役の学生諸君、学外あるいは他分野でご活躍の諸氏に本学の未来に託す思いを語っていただいた。

第5部の教室部門史は、医学科の大学院科目別に、平成20年度以降に重点を置いた教室の沿革、教育・研究・診療、未来への展望を自由にご執筆いただいた。併せて教室の動向を表すような写真を載せていただいたので、過去・現在・未来の同窓諸氏には様々な想像を膨らませていただけることと愚考する。

第6部には、これまでは別々に記念誌を編纂してきた看護学科、保健看護学研究科の歴史を加えて、京都府立医科大学としての一体化を図った。

巻末の資料編には、現在進行形の、壮大な大学整備構想についての記録を掲載した。大学附属病院の建替えに加え、教育体制、研究基盤等も含めた、本学があるべき未来像を現役の教職員が熱い議論を交わし、夢溢れるプランを創造しつつある。完成は、およそ14年後であり、多くの関係者はOBとして学外からその完成像を評価することになる。

全体を通し、目で見える京都府立医科大学の歴史や、明治から令和に至る学生生活の変遷など、ビジュアルにもお楽しみいただける書物として完成されたと自負している。

さて、新型コロナウイルス・パンデミックの中、約100年前(1918～1921年)世界を席捲したインフルエンザ(俗称、スペイン風邪)のことがよく話題に上る。日本での流行時の記録としては1922年、内務省衛生局より刊行された『流行性感冒』が知られている。これは幸いにも2008年に翻刻され『流行性感冒―「スペイン風邪」大流行の記録』として東洋文庫(平凡社)に収録されたので入手し通読したところ、「京都(府立)医学専門学校」と「常岡氏」という言葉に何度か遭遇して私自身驚くことになった。そこには京都府立医科大学の前身である京都府立医学専門学校学生にインフルエンザ菌ワクチンを接種し、ワクチン接種した者と接種しなかった者間でのインフルエンザ罹患者数を比較した常岡良三先生(衛生学・細菌学)の研究データが取り上げられていた。奇しくもパンデミックが終息した1921年はまさに本学

の大学昇格の年であった。

話は変わるが、芭蕉の俳諧の中心的思想が「不易流行」であることはよく知られている。『広辞苑』によれば、「不易」とは詩的生命の基本的永遠性を意味し、「流行」とはその時々の新風をさす。京都府立医科大学創立150周年記念誌の編纂に携わる中で、私の心に響き続けた通奏低音はまさにこの「不易流行」であった。明治初頭に、西洋医学を学んだ医師の養成という大きなミッションを担ってスタートし、今日まで150年間を歩んできた本学はそのミッションを「不易」としつつ、時代の要請に応える研究やイノベーションな医療の開発・展開に心血を注いできた、と言えるからである。『流行性感冒』の中に見出された短い記述に、まさに本学の建学理念を垣間見た思いがする。

本学が175周年、200周年を迎える時、大学、附属病院はどうなっているのだろうか。新病院、教育施設、研究施設が今の鴨川河畔に建ち並び、我々が想像さえできないようなAI、クロスリアリティ技術等を駆使した教育・研究・診療がきっと展開されているにちがいない。

京都府立医科大学が次の50年、いや100年に向けて弛まざる発展を続けていけるよう祈念して筆を擱く。

末筆ながら本記念誌の作成にあたり、お忙しいなか、玉稿をご執筆いただいた諸先生方、また、きめ細やかな編集作業にご尽力いただいた西山正俊氏、河北印刷、出版文化社の津山ゆみ氏に心より感謝申し上げます。

京都府立医科大学 創立百五十周年記念誌

2023(令和5)年3月発行

発行

京都府公立大学法人 京都府立医科大学

〒602-8566 京都市上京区河原町通広小路 upper 梶井町465

企画

河北印刷株式会社

編集・制作

株式会社 出版文化社

大阪・本町 東京・日本橋茅場町 名古屋・金山

印刷・製本

河北印刷株式会社

©Kyoto Prefectural University of Medicine 2023 Printed in Japan

※記事・写真の無断引用、転載を禁じます。